

明治45年に利尻島に渡海したヒグマ標本

佐藤雅彦¹⁾・金田幹男²⁾・山谷文人³⁾・間野 勉⁴⁾

¹⁾ 〒097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町 136 利尻町立博物館

²⁾ 〒097-0401 北海道利尻郡利尻町杓形字緑町

³⁾ 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 利尻富士町教育委員会

⁴⁾ 〒060-0819 北海道札幌市北区北 19 条西 12 丁目 北海道立総合研究機構 環境科学研究センター

Toe Specimen of a Brown Bear (*Ursus arctos*, Ursidae) Crossing the Rishiri Cannel in 1912

Masahiko SATO¹⁾, Mikio KANEDA²⁾, Fumito YAMAYA³⁾ and Tsutomu MANO⁴⁾

¹⁾ Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

²⁾ Midori-machi, Kutsugata, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0401 Japan

³⁾ Rishirifuji Town Board of Education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

⁴⁾ Institute of Conservational Sciences, Hokkaido Research Organization, Kita 19 Nishi 12, Kitaku, Sapporo, 060-0819 Japan

Abstract. Tracks of a bear (*Ursus arctos*, Ursidae) were found by a fisherman on the shoreline at Minami-hama, southern Rishiri Island, on May 30th, 2018. Because this is only the second known occurrence of a brown bear on this island (Hatta, 1912) since May, 1912, the last year of the Meiji Period, the landing was broadcast on national news throughout Japan. Although traces such as foot prints, dung and photos by sensor camera were confirmed in many locations on the island, no more traces were found after July 12th. When Mr. Andô, who was born in Motomura, Senhoshi, southern Rishiri Island, heard about the current landing of the bear on Rishiri Island, he decided to donate a dried bear toe to the Rishiri Town Museum on June 5th. His grandmother, Chiyo Kawamura, gave him this toe specimen including a claw, during his childhood, as the toe of a bear killed by fishermen at Asahihama, western Rishiri Island, in 1912. On the basis of an interview-based investigation, the Kawamura family at Motomura is related to the Takizawa family at Asahihama, the place of the killing of the bear in 1912. This dried toe is the only reputed physical evidence of the first bear's landing on the island.

明治時代以降、利尻島において初めてヒグマが確認された例は八田（1912）によって紹介され、それは1912年5月23日に利尻島南西部の鬼脇村（現利尻富士町鬼脇）で起きた事件であった。1912年以降、ヒグマが再び利尻島に出現したという報告は筆者らの知る限りなかったが、2018年5月30日、利尻島南部の南浜から沼浦にかけての海岸（N45°

06'26.2", E141° 16'48.8"）にてヒグマと思われる足跡が発見され、その後、島内全域で糞や足跡の痕跡が多数確認されたほか、設置されたセンサーカメラに林道を歩くヒグマの姿も撮影された（小杉、2018）。利尻町と利尻富士町ではただちに検討会議を開催し、毎日のパトロールのほか、防災無線などを通じて全島民に対して注意喚起を呼びかけた結

果、人的被害のほか、農作物などへの被害もなく、またその姿を直接目撃したという情報もないまま、2018年7月12日に利尻島南部のアフトロマナイ地区にて糞と足跡が確認された後、ヒグマの痕跡は見られなくなった(2018年12月1日現在)。しかし、島民のヒグマに対する恐怖心は、北海道本島のそれに比して極めて大きかったほか、ヒグマが自生していなかった離島に泳いで渡った個体があったことに対する話題性もあり、この事件は全国ニュースとして様々なメディアにて報道され、多くの人を知ることとなった(北海道新聞, 2018, ほか)。

これらの報道がきっかけとなり、2018年6月、富樫昇氏(利尻町杵形)から、八田(1912)で報告された明治時代のヒグマの爪が見つかったので、その所有者であり利尻町仙法志出身である安藤裕文(やすふみ)氏(岩見沢市)に資料寄贈の打診をする旨の連絡が利尻町立博物館にあった。その後、同氏から了解が得られたとのことで、6月5日、安藤氏ご本人により博物館に標本が持ち込まれ、寄贈されることとなった。標本には情報が記されたラベルや覚書などは一切付属していなかったが、安藤氏が小学生の頃、母方の祖母にあたる川村チヨ氏(利尻町仙法志元村)から「これは明治時代に利尻にやってきたクマの爪だよ」と言われて譲り受けたという。

標本の形状および計測値

寄贈された標本(図1, 標本番号RTMM310)は、爪の基部付近から切断された指の先端部で、爪や体毛、乾燥した筋肉などがそのまま残されたもので、保存状態は良好のものであった。標本の左側面部(図1A)は、爪の基部からその切断面まで約3cmに渡り、長さ約4cmほどの体毛によって覆われていた。その一方で、右側面部(図1B)の爪の基部付近は皮膚が裸出するほか、切断部の筋肉などがはっきりと観察される状態であった。このことから、本標本は指の間に刃物を前方から入れ、真横またはやや左後方に向けて切断が行われたものであり、左端に位置する指であることが窺われた。爪を背面(上面)から観察した場合、その先端部は右側への湾曲が認められた。一方、爪の腹面(下面)部においては、



図1. 1912年に利尻島で捕殺されたヒグマの爪とされる標本. A, 左側面; B, 右側面. a-d: 測定部位の基点.

中央よりやや基部に近い地点(図1B-d)から先端に向けて湾入部が見られ、その湾入面は右側面に湾曲し、湾入面も右側面に向かって広がっているように見えた。

爪の計測基点は、基部背面(図1B-a)、先端部(図1B-b)、基部腹面(図1B-c)、腹面湾入部の開始地点(図1B-d)とし、ノギス(DIAL-15, TAJIMA社)を用いて計測を行ったところ、a-b部59.2mm, b-c部43.0mm, a-c部18.1mm, b-d部29.2mm, d部の爪の高さ17.1mm, c部の爪の最大厚(爪の基部)10.6mm, d部の爪の最大厚9.5mm, であり、a-b部の長さはa-c部の長さの3.27倍を示した。

爪の計測値から前足であること、さらにはオスのものであると判断された(ブロムレイ, 1972; 間野, 未発表データ)。また、残された体毛・皮膚の状態や爪の形状などから、本標本は左足の第5指であることが想像された。

標本の由来

八田(1912)によると、島に上陸したヒグマが海に戻った後、アフトロマナイの沖付近で再び目撃され、船に乗った島民らにより海上で撲殺されたという。この際、陸に引き上げられたヒグマとそれを囲むように島民たちが並ぶ姿が寺島豊次郎氏(鬼脇)によって撮影され(門崎, 1998; 古川, 2018), 八田(1912)の口絵としても掲載されている。撲殺され陸に引き上げられたと考えられる場所は諸説あり、旭浜神社付近の浜にあたる赤坂八太郎漁場(東利尻町立石崎小学校, 1983)のほか、旭浜地区の瀧澤家の崖のある浜であったという伝承もあった。

本標本の安藤氏の前の所有者である川村チヨ氏が嫁いだ川村家は、代々利尻町仙法志の元村地区で生計を立ててきた家である。しかし、川村チヨ氏の母親にあたる川村スエ(またはスイ)氏は旭浜地区の瀧澤家の出自であることが、川村家の方々からの聞き取り調査にて確認されている。そのため、旭浜の瀧澤家にクマの爪がもたらされ、それが川村スエ氏などを通じて仙法志地区に伝わった可能性が考えられた。

しかし、その一方で旭浜地区の瀧澤家の子孫の方にお尋ねしたところ、ヒグマの毛皮や爪などが瀧澤家に伝わることはなく、また今回寄贈された爪の存在についても聞いたことはなかったという。瀧澤家はもともと秋田県から利尻島北部の湾内地区に移住し、その後、島の南部に移動しながら、1937(昭和12)～1938(昭和13)年頃から「四号漁場」と言われる現在の旭浜付近で建網漁を開始したとされるが(川村, 2015), クマが上陸した1912(明治45)年当時、旭浜にすでに居住していたかどうかは不明であり、クマが上陸した年よりも後の時代に居住した可能性もある。そのため、川村チヨ氏が旭浜の瀧澤家や、瀧澤家と親戚関係にある川村スエ氏経由で本標本を入手したという説には疑問も残り、筆者らが現在では推測できない全く異なる経緯でクマの爪を入手した可能性もある。

旭浜で撲殺されたヒグマの頭骨は粉碎され葉として配られ(金田, 1984), 毛皮は赤坂漁場の親方に

渡されたほか(東利尻町立石崎小学校, 1983; 金田, 1984), 捕殺に直接関わった佐々木家にも毛皮が敷かれていた、という新たな聞き取り結果も今回得ることができたが、いずれにしてもこれらの毛皮の所在は不明のままであり、1912年に利尻島で捕殺されたヒグマの標本類は現存しないものともこれまで思われていた。そのため、寄贈された標本は当時の事件を伝える唯一の物的証拠として貴重なものと言えるほか、残りの指などの標本が島内外にも残されている可能性をも示唆している。

謝辞

貴重な資料の保管を長年されてきた故川村チヨ氏と寄贈者である安藤裕文氏、寄贈の仲介をいただいた富樫昇氏に感謝申し上げる。田中和紀氏には独自の聞き取り調査などをしていただいたほか、以下の方々には様々な情報提供や本調査に対してのご協力をいただいた。お名前を記して、心より御礼申し上げます(五十音順): 風間健太郎氏, 風間麻未氏, 川村タカ氏, 川村テチ子氏, 工藤玲真氏, 小玉喜衛氏, 島谷一昭氏, 富樫紀代子氏, 中島浩之氏, 吉田欽哉氏。

参考文献

- 阿部泰三, 1963. 熊百訓. 山音文学会. 83pp.
- 朝日新聞, 2018. いらないはずのヒグマの足跡か 泳いできた? 利尻島、警戒. 6月1日デジタル. <https://www.asahi.com/articles/ASL502T73L50IIE005.html> (2018年6月4日閲覧). 朝日新聞社.
- ブロムレイ, G. F., 1972. 南部シベリアのヒグマとツキノワグマ - その比較生物学的研究 -. 北苑社. 札幌. 134pp.
- 古川恭司, 2018. 利尻島郷土資料館ものがたり. 24pp. 自刊.
- 八田三郎, 1912. 熊の渡海. 動物学雑誌, 24(288): A1-A3.
- 東利尻町立石崎小学校, 1983. 1982年度閉校記念誌. チェネシララ. 東利尻町立石崎小学校. 102pp.
- 門崎允昭, 1998. 哺乳類. 利尻富士町史編纂委員

- 会編, 利尻富士町史: 62-66. 利尻富士町.
- 金田幹男, 1984. 一枚の写真より. 文芸りしり, (6): 41-45.
- 川村テチ子, 2015. 瀧澤漁場〜なつかしの番付板. 利尻島の水産だより, (113): 6.
- 小杉和樹, 2018. 利尻島のヒグマ騒動からなにを学ぶか. モーリー, (50): 10-13.
- 日刊宗谷, 2018. 106年ぶり利尻島内にヒグマ. 6月1日. 宗谷新聞社.
- 北海道新聞, 2018. 利尻島 ヒグマ泳いで上陸?. 6月1日朝刊. 北海道新聞社.